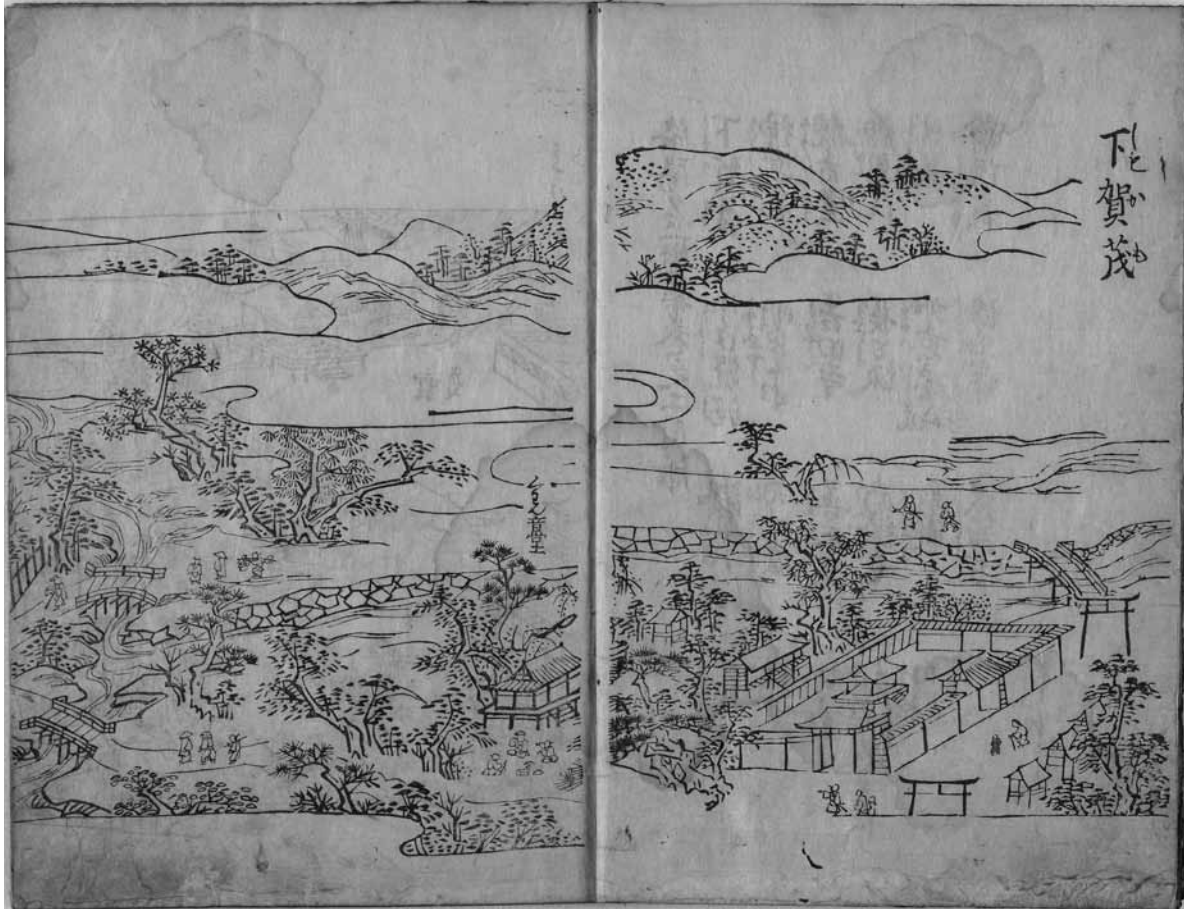
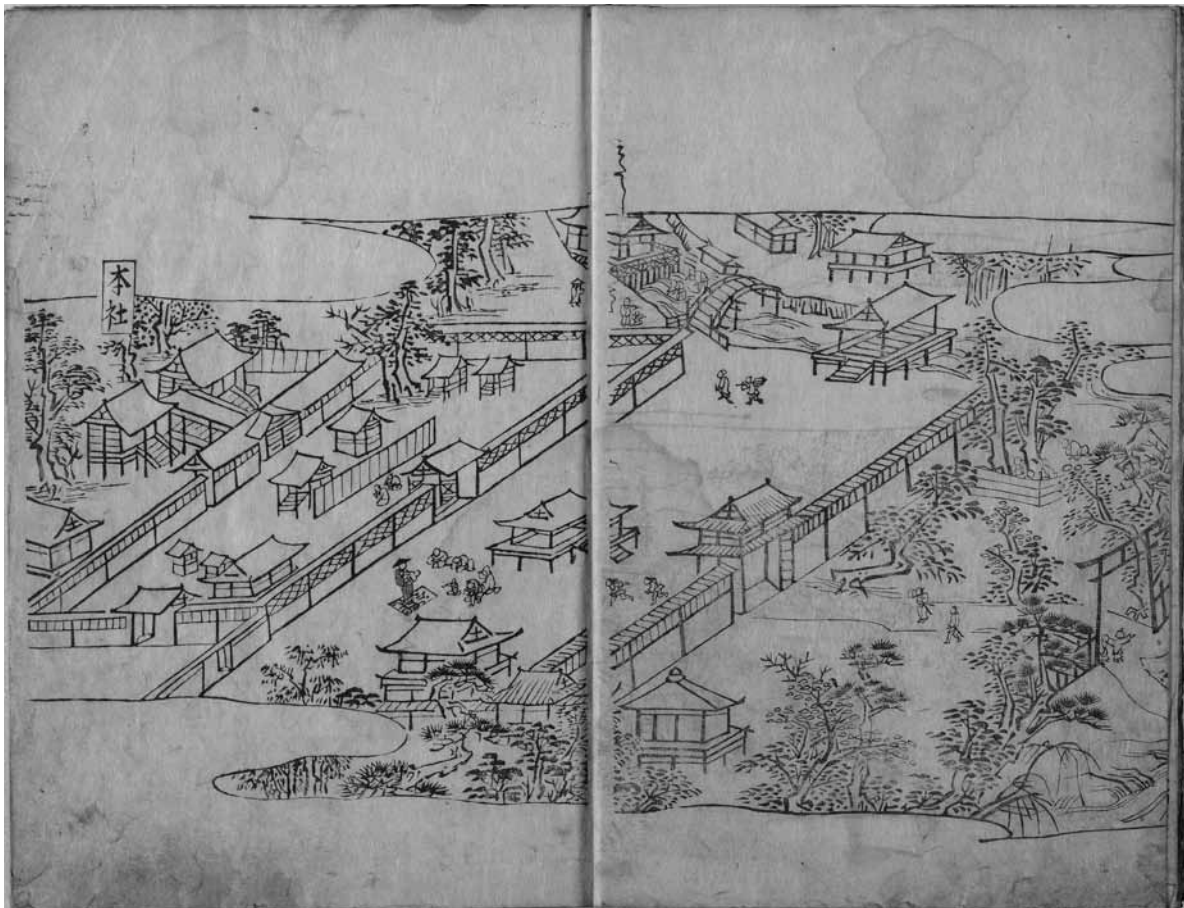


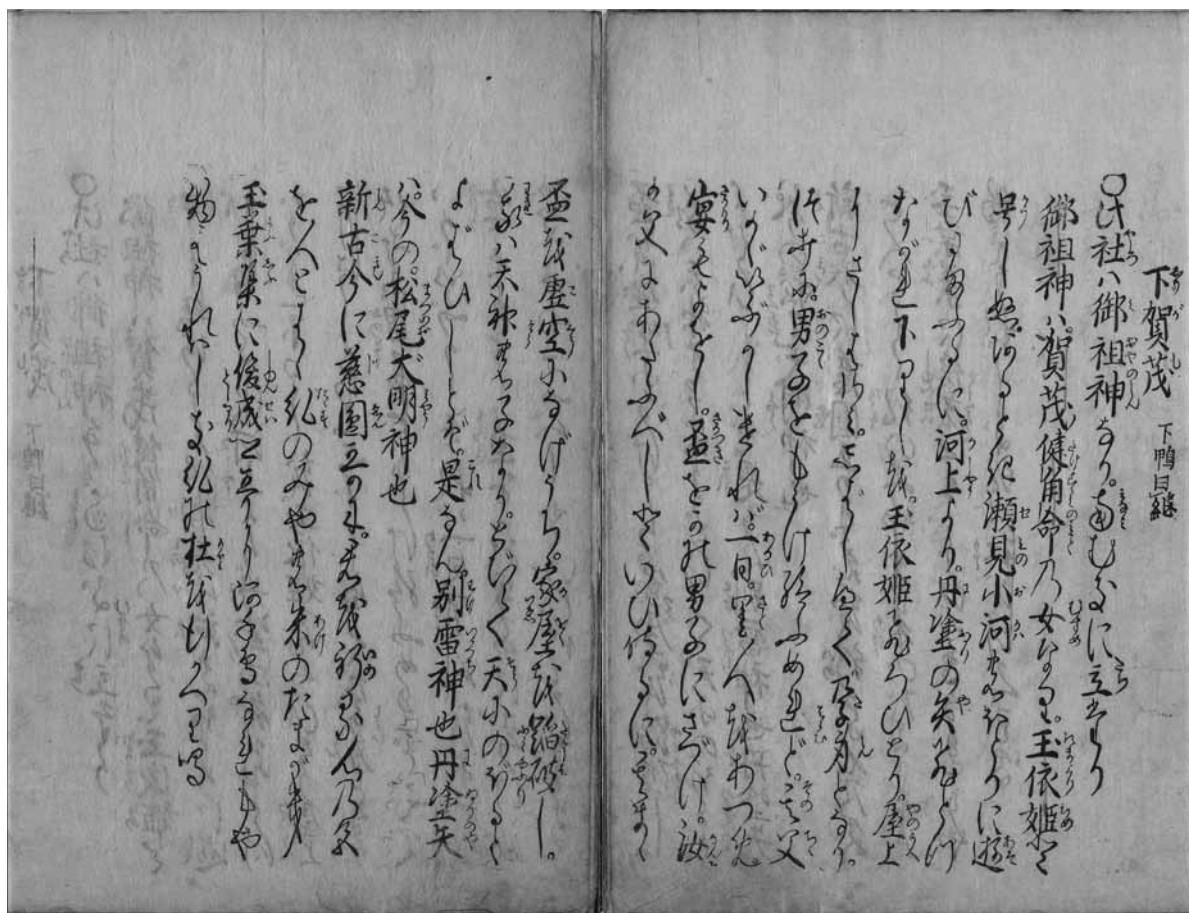
卷二 下贺茂 下鸭叫做纠



京都府立综合资料馆藏



京都府立综合资料馆藏



京都府立综合资料馆藏

下贺茂 下鸭叫做纠

这座神社面南而建，供奉的是名为御祖神的神灵。

御祖神是贺茂健角命的女儿，人们叫她玉依姬。据说有一天，她在濑见小河河畔游玩时，从濑见小河的上游漂来一支被涂成红色的箭。玉依姬拾起那只箭，把它插到了自家的屋顶上。不久之后，她身重怀胎，生下一个男孩。可是，她的父亲觉得百思不得其解，于是有一天，他召集村里的人大开酒宴。酒宴中，玉依姬的父亲把酒杯递给那个男孩，并说：“你把这个杯子给你父亲。”听了这话，男孩立刻把那个杯子抛向天空，自己踏破屋檐，高声喊道：“我乃天神之子，我要飞上天空！”这个男孩就是别雷神。那只被涂成红色的箭，是现在的松尾大明神。

载于《新古今集》的慈圆的和歌中，有一首是这样的：“如果有人问我，祝福吾皇长寿的你的心是什么样的，我的心和纠之宫（下鸭神社）被涂红的围墙一样，是赤心一片。”

载于《玉叶集》的俊成的和歌中，有一首如下：“贺茂川的鸫鸟啊，你也有什么伤心事吗？要不为什么在纠之森走来走去鸣叫不停呢。”

（李 婷 译）

【現代語訳】

下賀茂 下鴨は糺と言います。

○この神社は、御祖神（みおやのかみ）という神様をまつています。南向きに建てられています。

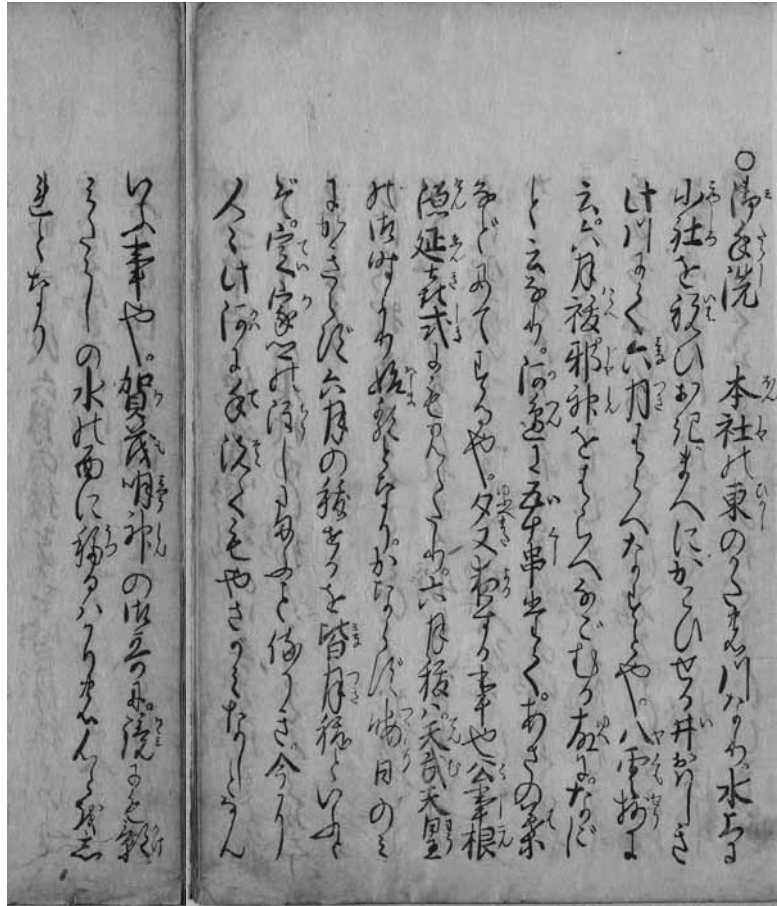
御祖神（みおやのかみ）は、賀茂健角命（かものたけすみのみこと）の娘です。彼女を、玉依姫（たまよりひめ）と称しました。ある時、彼女が瀬見小河（せみのおがわ）のほとりを遊び歩いていたら、瀬見小河の川上から、赤く塗った矢が一本流れ下って来ました。玉依姫は、その矢を拾って、自分の家の屋上に差しはさみました。すると彼女は、しばらく経って妊娠してしまい、とうとう男の子をお授かりになられたようです。けれども、彼女の父はなんとも不思議に思ったものですから、ある日、里の人々を集めて酒宴をもよおしました。その時、玉依姫の父は、その男の子に盃を与えて、「お前の父親に、この盃を与えなさい」と言いました。すると男の子は、すぐさまその盃を天空に放り投げ、自分は家の屋根を踏み破って、「わたしは天の神の子供である。飛んで空にのぼる」と、大きな声で叫んだということです。これこそが、別雷神（わけいかずちのかみ）です。赤く塗った矢は、現在の松尾大明神（まつのおのだいみょうじん）です。

『新古今集』に収録されている慈円の和歌に、次のようなものがあります。わが君（天皇）の長寿を祈るわたしの心の色はどのようなものですかと、もし人が尋ねたならば、糺の宮（下鴨神社）の朱塗りの玉垣のように、赤心（まごころ）そのものですよと、神かけて答えましょう。

『玉葉集』（ぎょくようしゅう）に収録されている俊成の和歌に、次のようなものがあります。賀茂川の千鳥よ、お前も何かつらいことがあるのでしょうか、糺の森を行ったり来たりしながら鳴いているのは。

（赤瀬信吾）

卷二 御手洗



京都府立総合資料館蔵

御手洗

是位于下鴨神社正殿东边的小河。流水之上修有一个小小的神殿，将其作为神圣之物供奉。在神殿前边供奉着一口被围起来的井。

据说在这条河里进行六月祓。根据《八云御抄》的记述，因为六月祓是祓除邪神以求平和，所以被称作“祥和之祓禊”。在御手洗川的河边竖起挂有麻的竹条，以麻叶等作为祭祀道具进行祓除。祭祀仪式在傍晚或夜晚举行。亦可见于《公事根源》和《延喜式》。藤原定家大人在笔记中写道：六月祓始于天武天皇在位期间，不仅是六月最后一天举行的仪式，六月里举行的所有祓除都被称为六月祓。至今人们都传说，之所以在这条河里洗去手中的污秽，是因为再没有哪一位神灵比下鴨神社的神灵更善良了。贺茂明神的和歌中说，你应该看到过我的身影倒映在清澈如镜面的御手洗川的水面上吧，请你知道我的心是如此盼望你的愿望能够实现。

(李 婷 訳)

【現代語訳】

○御手洗 下鴨神社の本社の東方の川です。流れる水の上に小さな社殿を造って神聖なものとして祭り、社殿の前には囲いをした井戸が鎮座していらっしゃいます。

この川で、六月祓（みなづきばらえ）をするということです。『八雲御抄』の記述によれば、六月祓は、邪悪な神を祓ってなごめる（おだやかにする）という理由から、「なごし」と言うのだそうです。御手洗川の川辺に五十串を立て、麻の葉などを神具にして行なうということです。夕べまたは夜に行なう神事です。『公事根源』『延喜式』にも見えます。六月祓は、天武天皇のご在位の時から始まると伝えられます。必ずしも晦日に行なわれる祓えにだけ限ることなく、六月中に祓えをするのを皆月祓（みなづきばらえ）と称すると、定家卿の書き記されたことがございました。今にいたるまで人々が、この川で手を洗い清めるのも、これほど優しい神様はいないからだと言いつづけていることです。賀茂明神のお歌に、わたしの姿が、鏡にも清らかに澄んだ御手洗川の水の面にも映っているのを、そなたは見たことでしょうか、それほど、わたしがそなたの願いを成就させる心でいることを知りなさい、と詠まれています。

(赤瀬信吾)